

白川 岸等 地 図 9 反
 三日月 封 江 東 地 図
 1606P
 1753P
 1269P
 1263P

第十八章 洛陽の都

洛神の賦

ちつたりと流れにた黄河の水が、こころ
 なしか早くなつてきたようだ。
 黄河の黄色い水面に浮かぶ流木など、見る
 まに後方遠くへ押し流されてゆき、うにな
 漕ぎ進む船の速度が、いつそう遅々とし

たものとなつた。
 それは、洛陽が間近かになつたてきたこと
 を物語つていた。
 ここに、難升米らの一行は、軽快な小船に
 乗り替え、水飛沫を崩つていった。
 小船の列は、開封・鄭州あたりを過ぎ、
 洛水へと入った。
 以下の第239回、洛陽近傍の河川を参照。
 その途端、あたりの様子が一変した。
 幾条もの、キラキラ光る浅い川筋が、も
 つれるように合流したり、あるいは分かれたり

2022
瑞 2/21
(2022)

伏見 (ふき見) 天皇 (みかど) の娘 (むすめ) 洛水 (らくすい) の神 (かみ) になったという

① 1163-2/2

甄氏 1213 下
漢 魏 六朝 1294
94下
1713
1.271 - 1/2

漢 魏 六朝 1294
184
184
1216

甄氏とは（曹植の）兄の文帝曹王の皇后であつた甄氏を指し、現在の洛神の賦に改めた

もの恋一げにたあむ。

し、長い袖をかざして、遠くをながめつつ、

かにひく。女神は綺麗な打掛をひるがえ

縫取りした履物をはき、あや絹の裳褙を軽や

とにまはゆいばかり。足には遠遊と

の耳飾りをつける。頭には黄金や翡翠の髪飾

うす絹を身にまとひ、美しく彫刻された宝玉

農。その姿は画中の神仙のよう。さらさらと衣

口唱一てゐるのだった。

を、吏は、一人、ものおもいにひたりながら

植のやがで妖婉な口洛神の賦の一節

当時の人々が好んで口吟していたあの曹

と口ずさみはじめた。

難升米等を案内してきた吏が、何やら、そつ

とそんなとき、帯方郡の太守の使として

甄逸の娘
三口丸
エー1517
4行
ルビ有

1.271^p - 2/2

小本 649^p
大カマ 1500^p

ルビ有

のは甄氏の子の明帝曹叡であつた。という。
へ「漢・魏・六朝・唐・宋散文選」中国古典
文学大系、平凡社、九二頁（四）
賦✓。同書、九四頁の解説参照。
* なお、甄しんという字はしん漢音・吳音共に
「ケン」とも「シン」とも訓むという。（「大
字典」上田万年、講談社へ甄✓参照）

（*）

三〇支那
一八八下
25

曹丕 = 文帝 1294
其 次 15行

1.272P

中大兄 紀下 254, 352(注)
大海人 382
二男 1390 15 花ひく 48~

曹操 1291
魏の始祖

魏国の始祖である曹操には、二十五人の男
子があった。女子の数はわからない。この二十五人のなかで、皇后の曹氏が産んだのは四人であり、曹丕（文帝）と曹植は、
氏の子である。そしてこの二人が、いちはん
出来が良かった。三男の
曹丕と曹植のふたりは、あらゆる
面で競合相手だった。
どことなく、後代の中大兄皇子と大海人皇子
我が国の
の二人の兄弟の仲をおもわせるものともい
得ようか。目的には、
①曹丕と曹植は、政治の面では、父の後継者の
地位をめぐってあらそった。父の心はいつた
ん。弟にかたむいたか、結局、曹丕があとを
ついで魏国の初代皇帝（文帝）となった。
②また、曹丕と曹植のふたりは、文学の上で
も、よき競争者であった。
• とはいえ、詩作の面においては、
弟が兄をしのいだ。

この面
9行
面

伊予國風土記 495¹ 漢・魏・六朝詩集 平A社
 1,273^{P-3/2} 七歩を漸つ 聖徳太子の詩 由 4250, 4462^{-1/2} 大蔵 1898

1行アケル

「小斬」 111^下

七歩詩

小林 9⁰

そうしんく

(曹植)

2字命令

本	其	煮	
是	在	豆	
同	釜	持	
根	下	作	
生	燃	羹	
相	豆	漉	
煎	在	豉	
何	釜	以	
太	中	爲	
急	泣	汁	

大蔵 1422

大蔵 516

大蔵 945

大蔵 1774

大蔵 1374

大蔵 2101

大蔵 1441

大蔵 1281

220 金寸 水径 29^p 左下
 1103^p - 1/2 块图

- $\in \mathbb{K}$

1.276^P

純在 叙大権 49^P

一歩一歩 1284^P 115^分

米

「とうとう来たんだ」
● 難升米は、凜凜と高鳴る気持ちを押えなが
ら、一歩一歩、歩を進めていった。
水が流れゆくそのはての、遠い遠い、東海の真
只中に絶在する祖国のことに、想いを馳せて
いた。
へ太陽の御子。日御子は、いかにお過して
あろうか。
● 心は疼くほどに、倭国の女王・日御子を慕
った。
「――日御子よ。私はついに、洛陽の
都へやってまいりました」
● 難升米は、胸の内に、そつとつぶやいてい
た。

電 打たす

たつな

手廻 1372

もすろ 2189

打たす 191馬に木又「河」

①279

「ただただ」

1.277

立派 はなやか 美しい

次末 とろかす 水南

②279

「人とうきま」

③279

「みやひやが 見事(美事)」

④279

「みやひやが 見事(美事)」

⑤279

「みやひやが 見事(美事)」

⑥279

「みやひやが 見事(美事)」

⑦279

「みやひやが 見事(美事)」

たりと馬を打たせてやって来る。
を固めた武人が、手廻さばきも堂々と、ゆっ
た女達が、三三五五連れだって、集一そうに
何やら語らいながら、浮橋の上を往き来する。
色とりどりの衣服を着て華やかに身を飾っ
華やかな髪飾りや首飾りなどを身に付け
難升米筆は皆立ちならび下うつとりと見とれて
「ああ、何という美しいさだろう」
陶然とさせずに、おかなかった。
洛水の川面に映いて、見る者の心を、流
鮮やかな彩色は、世のものとも思え
高雅な雰囲気をも、出していた。
浮橋は、その麗な美しさを、流
欄干などにほどこされている装飾は実に美事で
その浮橋の優雅で華麗なことは言葉につく
かたく、思わぬ、息を吞むほどであった。
やかて、洛水にかけ渡さ小ているように美
日浮橋のたもとに到った。

⑧279
「みやひやが 見事(美事)」

スグー1188°
 規模 127°
 何となく
 ④1131°の図
 「小口」87°第16回 4.2km x 2
 元2110°

④1184°
 ④1187°
 1.278°

④1277°
 ④1275°
 ④1269°
 ④1275°(表外) 529

洛水の豊かな水に浮ぶ。幻想的に揺らいでい
 た人々を乗せて、―――。青い空を写す洛水の流れの上を川風が吹き
 渡り、水面を走っていった。さざ波が、きらめきなが
 ら、水は、洛陽の都の中心軸線と交わり、北魏時代の
 宮城南面の門について、の項において、洛陽外郭城
 の南の城壁が、浮橋の上流と下流の両方に向か
 って、真直ぐ延びていた。はつきりとは
 見定め得、外郭城のその端は、どう見ても、
 ・それは実に、今の尺度で、右に四回強、
 左に四回強も打ち続く、想像を絶する都城で
 あった。
 なんと大きな都なのだろう。

美、さだかう
 元、元、元、元

一、さて、洛水に浮かぶ浮橋のすぐ北のところに、最外外郭城南正面の門があった。
 かねてから（周・漢の時代から）伝えられてきた話の通りだとは
 左倒されるばかりだった。
 東海海中の島からやってきた者達は、ただただ
 難千米等は、洛水の水の流れの上に揺りぐ
 魏国の面目を示して余りある美麗な浮橋
 を、夢見心地のうちに渡っていった。
 トル
 一、なお、洛陽宮城（九六城）の南を東西に流れる洛
 水は、例えてみるならば、伊勢神
 宮内宮の宮城（四重の垣からなる宮中）の南を東
 西に流れる五十鈴川に相当するといえよう。
 一、昔は、伊勢神宮内宮の正宮の正面あ
 たりで川が二筋になっており、その中島に度
 会郡司が黒木の橋をかけた。神嘗祭を始めと
 するいろいろな三節の祭ごとと、その橋は用いら
 れるだけで、平常は誰も渡ることのできない
 定めであつた。
 一、一、伊勢神宮、桜井勝之進、学生社
 一、一、八、九頁、一、八、黒木、参照
 一、また洛水の流水は、平城京の南を東西に流

洛陽の市 槐・柳 1294⁴ 洛陽ガランビ 6¹ 入ぎ4人 名 234⁴ 掖門 正門の傍にみ 1,280^P
 城中 → 外郭城 1864⁴ 小門 1336^P 城内の御道 1302^P 公卿 617^{cm} 後漢 23.04^{cm} 魏 24.12^{cm} 西晋 24.12^{cm} 23.04^{cm}
 23 × 4 = 92 20 × 4 = 80^{cm} 1336^P 1336^P 1336^P 1336^P

宮城

最外

外郭城南面の正門をくぐると、そこには真直ぐ北へ

伸びる大道があつて、正面奥のかなたに見え

る宮城（九六城）へと通じていた。

この最外外郭城内の大道は、九輦の車が並らぶ

ほど広く、三つに仕切られていた。

① この三道のうちの中央の道が御道で

その西側に高さ四尺余の土牆（土のかき

ぬ）が築かれており、天子・公卿高官の為の車の

用道路となつていた。

② 御道の両側の通路が一般庶人用とされて

最外外郭城門の左側の脇門を通つて入り、出る

時は右側を通るといふ定めがあつた。

太平御覧に一九五に引く晋の陸機の曰洛

陽記によると、宮門（宮城門）の中、城の大道は、

みなこのように三つに仕切られていたとい

道の両端には槐や柳の並木があつた。

（洛陽伽藍記・水経注に中国古典文学大系

（2）平凡社、五頁。六頁注三一参照）

その大きな通りの両側には、富豪

達の豪華な邸宅が軒を連ねていたようである。

1.281 P

掲載 673 43 巻 富家 1933 楼 小林 520 P
天の聖殿 改訂 2219 P

● 例えは、

洛陽の町の南の城門の近くには、青い漆

で塗った楼へ二階建ての建物がある、その

屋敷は、高い門と、二重の門とで守られている

た「漢和辞典」小林信明、小学館入楼

という。(曹植の詩「美女」参照。「漢・魏

六朝詩集」(6) 平凡社、一三頁参照)

南の城門の近くに二階建ての屋敷があった

と詠まれているもの、宮城(九六城)

の南の正門「平昌門」近傍の二階建ての門(近傍に

内二階建ての屋敷(人が居住する為の

屋敷)があったとは考えにくい

* 正門近傍の京域内、最外外郭城の

のではなかろうか

*

2073

128

三連たから

128

洛陽

吉川英治

49

128

1182

か

噴

これが夢にまで見た名都洛陽城

うたわれる宮城が厳然として

活気に満ちあふれた城中であつた

美しくも生き生きとした、はじけんばかり

う真直ぐ続く広い広い大道は、行き交う人々

てきた難升米にとつて、高天原の都をのみ見な水

陽千戸と、街路樹が整然と並んでゐた

遙かに続くその天子の御道の左右には、洛

と、息を詰め己の目を疑つた

難升米は、外郭城内（京域内）に入るや、

は、

最外

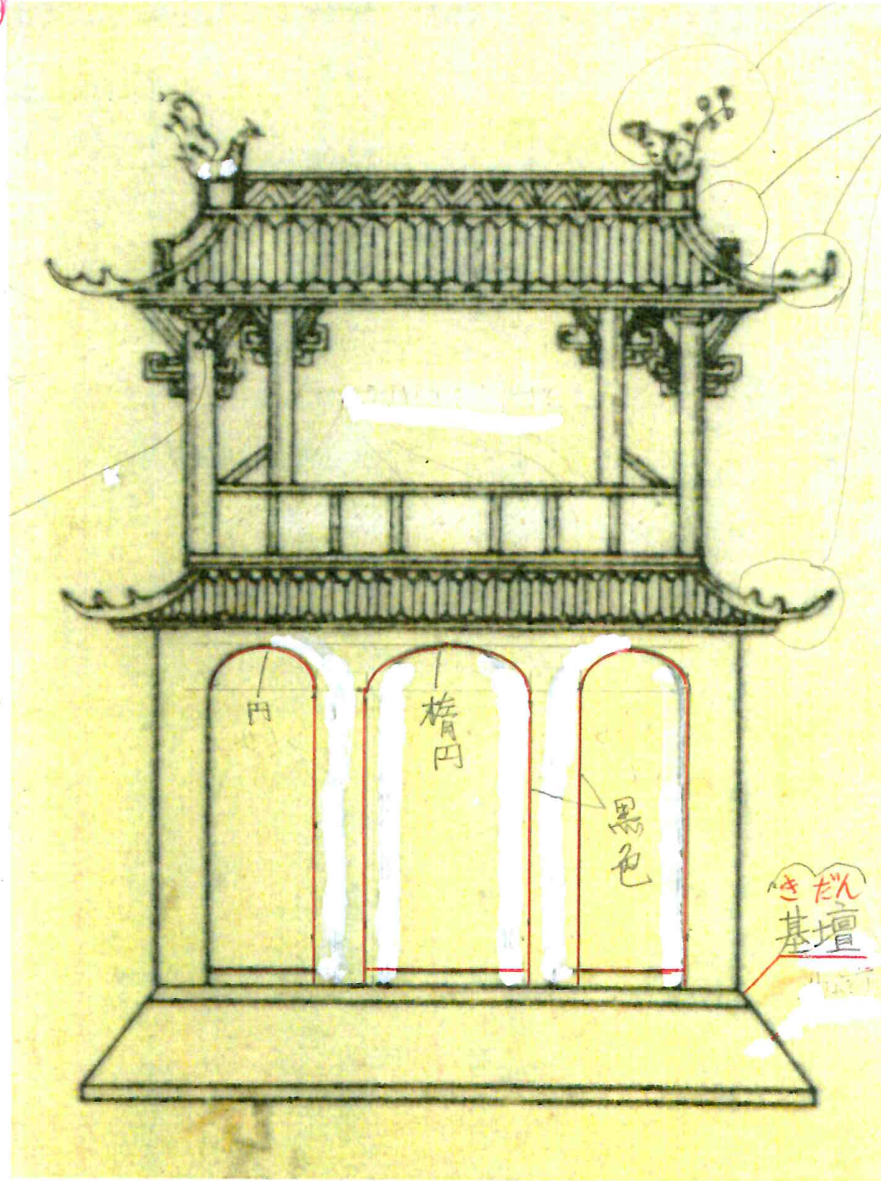
① 1315- $\frac{1}{3}$ に ② 1155 ③ 平昌門が正門 ④ 洛陽に記 4 2層 豪華 729^P 1.283^P
 同文 ⑤ 1276 3層 ⑥ 1288^P ⑦ 1288^P ⑧ 1288^P ⑨ 1288^P ⑩ 1288^P ⑪ 1288^P ⑫ 1288^P ⑬ 1288^P ⑭ 1288^P ⑮ 1288^P ⑯ 1288^P ⑰ 1288^P ⑱ 1288^P ⑲ 1288^P ⑳ 1288^P ㉑ 1288^P ㉒ 1288^P ㉓ 1288^P ㉔ 1288^P ㉕ 1288^P ㉖ 1288^P ㉗ 1288^P ㉘ 1288^P ㉙ 1288^P ㉚ 1288^P ㉛ 1288^P ㉜ 1288^P ㉝ 1288^P ㉞ 1288^P ㉟ 1288^P ㊱ 1288^P ㊲ 1288^P ㊳ 1288^P ㊴ 1288^P ㊵ 1288^P ㊶ 1288^P ㊷ 1288^P ㊸ 1288^P ㊹ 1288^P ㊺ 1288^P ㊻ 1288^P ㊼ 1288^P ㊽ 1288^P ㊾ 1288^P ㊿ 1288^P

門だけは雲にも届かんばかりの費(瓦びきの
 て、地上百尺(十丈)であつたが、この大夏
 大の高さとした。洛陽の城門の楼はみな二層
 西側の大夏門を三層の門楼とし、地上二十
 七(北魏の)宣武帝は、魏の明帝になら
 *なお、追つて述べるように、宮城北面
 の宮城門日平昌門に、あつた。門想像図 参照
 宮城は、次第に大きくなり、なつてゆ
 宮城の豪華さは、いや増しに増してゆく。
 御道の突当りには、厳めしく、華麗な二層
 宮城門を仰ぎ見ながら歩を進めて、いつた
 難升米達は、真直ぐつづく大道を、一歩一
 歩、宮城を仰ぎ見ながら歩を進めて、いつた
 殿のみならず、殿舎の費の向うにまた高く低
 く費が重なりあい、これら全体が渾然一体と
 なつて、壮麗な王城を形造り、大きな威圧感を
 もつて迫つてくるのだつた。
 紫瑠璃黄玉の城楼宮門が、真正面に光り輝
 いており、美々しくも豪壮なその様はたとえ
 ようもない。
 いかにも、宮門、楼観、宮牆(王宮の垣)、諸宮

1,284^P

*左半分をトースして、左右対称にする
(右半分は、何を描いているのか分かりず)

* (カラーではなく) 白黒にしたり。
* 線を明瞭に下さい。



左の鳥の絵に合わせる。

左に合わせる。

きれいな連続模様にしておく。

※左半分を活かし、左右対称にする

※中央の門が広くて、左右の門がせまい。

① 1312 基壇

漢代石関 ① 1305 7/7

① 1312 基壇

① 1312 基壇

XEP HV

※この図のようなものを「双関」とはいい、
※左半分は、
※この図のようなものを「双関」とはいい、

「関」西京雜記 日抄 ① 1312 16行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

① 1312 13行

140G 第241図 洛陽宮城門想像図

- [注] ① 『漢和事典』 小林信明、小学館、1019頁に、この図が「関」として描かれている。
- ② 1か1当図は、**宮城門**であろうと考えてみたい。
- ③ 2階部分は、**亭山**(あずまや)と呼ばれていたのではなかろうか。
- ④ この図のようなものを、「**双関**」とは言うまい。

535^P

たと 例えは ①1282 199 改行 改行 1.285 宣陽門は基壇の上に 大夏門 1155 改行 改行 1315-3/3

(註) 例でない

屋根のむねであつた
とII(第十八章へ端門)の項において詳述した
ともあれ、二、三九年当時の宮城門の楼は、大
夏門を除いて、みな二層で、地上百尺(十
丈)であつた。とII(十八)となつて、
また、宮城の正門平昌門は、あるいは一段
高い基壇の上にあつて、目を射るほど真白
な二階建ての門であつたかも知れない。
陽渠水(宮城のまわりをめぐる水路)
水経注に、穀水条に、
は、宮城西北隅から南へ向かい(宮城から三番目の
閶闔門に至る。これは漢代の上西門である。
漢家は、成(いぬ・西北)に厄があるの、丹
をもつてこれにほりつけたのである。
と記す水ている。(漢代の上西門)
つまり、西北の門以外の宮城門は全て純白
だつた、というのであろう。
は、とII(十八)で、宮城南面の正門である日平昌門
壁言えて、いうならば、

倭の女王卑彌呼が魏国へ朝貢した

1128P 白木 4/6 紀上389P 2879P 1.286P 2/7 紀上388P 因4に1291-1/2は行 参考頁 2行
 1288P 左 右 46 大町753 189P 廟

手宮の正殿「廟」(堂)。また、祖先の霊を祭る(こう)。
 「廟」のたるきに彫刻したり、柱を丹塗りい
 たりするのは、みな礼ではないし
 (大宮典に上田下年、講談社へ廟へ、公使が廟へ参照)

周・漢・曹魏の洛陽城の遺風を受け継いだと思
 われる日本の宮城におりても、同様
 へ王宮の廟堂の柱や宮城門に丹塗り
 するくとなかったたのであろう

と思われ。
 難波の高津宮についで、こう記文小てい

宮垣空屋、聖色
 聖は、白く塗る、漆喰
 をかける意「せず」此、私曲の故を以
 て、耕し績む時を留め(い)となればなり

とある。(日本書紀(上)日本書紀文学大系、岩波書店、三八頁)

古来、我国では、宮垣や空屋を白く塗つ

水なかつた
 (第四十八章へ聖帝)の

紀上390P 8行「百姓窮乏」とある

市/558P-1/2 朱塗りの柱と白壁

朝倉院大極殿の瓦の主な建物は入・朱柱白壁

巻人の日本史(1) 171 掲載 = 162頁

11は前頁9行

1286P-3/7

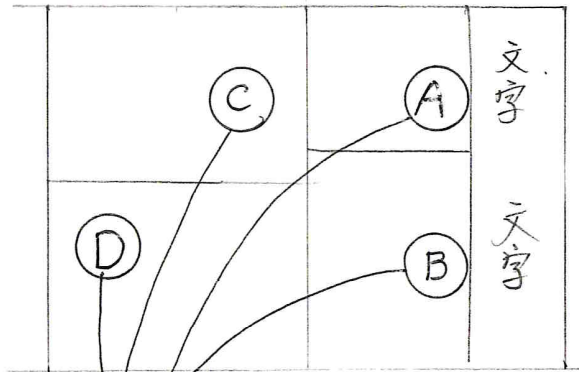
下
475

項におい、再検討したい)
回大阪府中央区(大阪城南側)の前期難波宮
(七世紀後半)跡で、深さ六メートルの(北)谷跡から
大量の壁土が出た(第242、243頁写真図版15参照)
・大量の壁土は、谷の斜面に五〇センチの
層をなして堆積。他に、宮殿の石敷き舗装面
とみらゆる平らな面のある長方形の榛原石な
とも含まれていた。
・壁土は、大半が数十センチ大のかたまり。熱
受けて赤く変色したり、硬くなったりして
る。火災で焼け落ちたものらしい。
・中には、荒塗り、下塗り、上塗りを重ねた
後、表面に白土あるいは漆喰を白く塗った丁
寧なつくりの壁土も含まれていた。
・白壁は、宮殿の中でも特に格式の高い内裏
(天皇の住まい)など中樞部の壁材とみられ
る。
・日本書紀に天武天皇の朱鳥元年(六八六)
正月十四日条に、
「難波の大蔵省に失火し、宮室ニとごとく

の簡筆に述べている

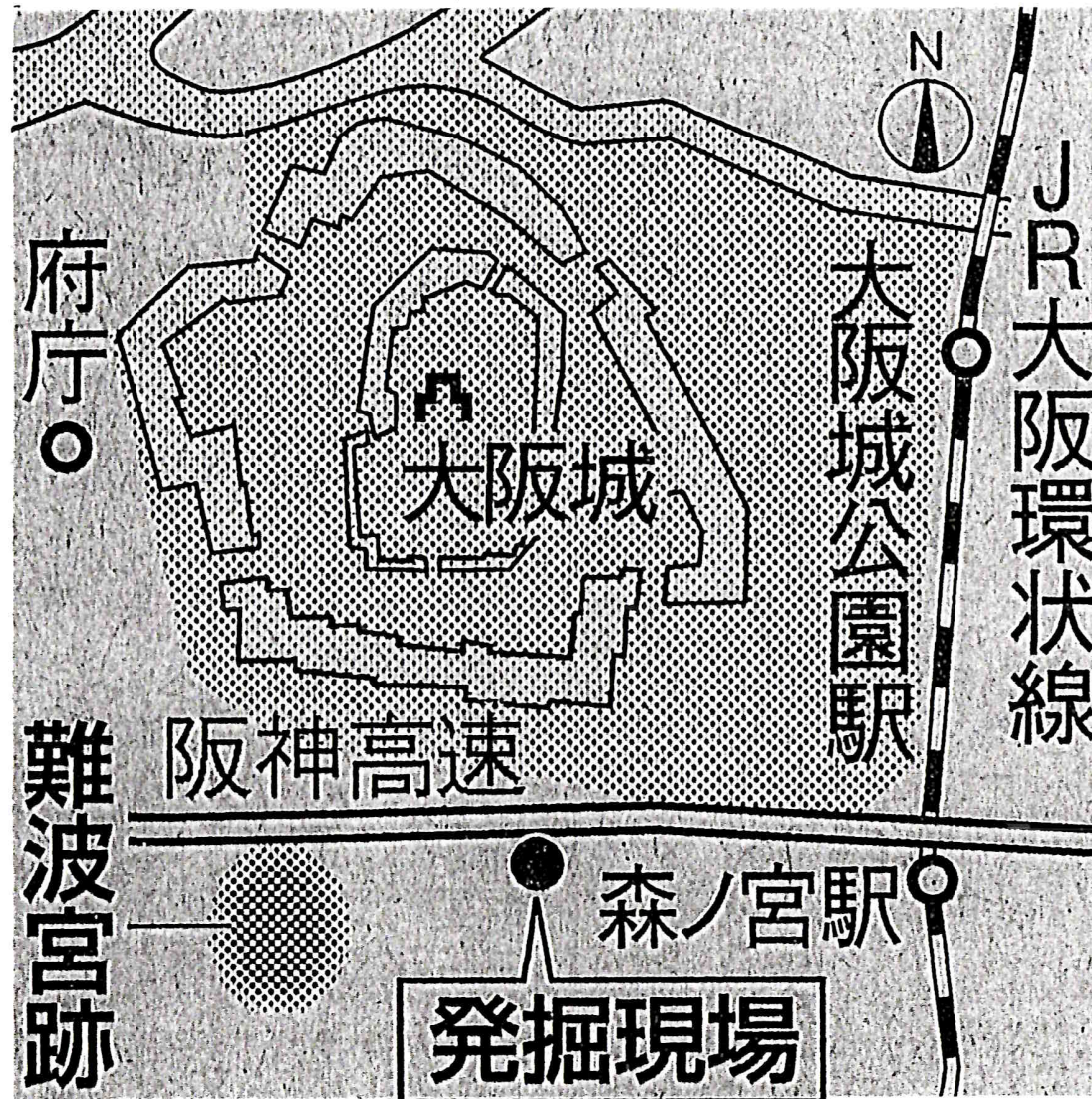
1286P-4/7

A



* A B C D を、
このように配置し
下さい。

* アミ点部分を、
緑色にタに変更
下さい。



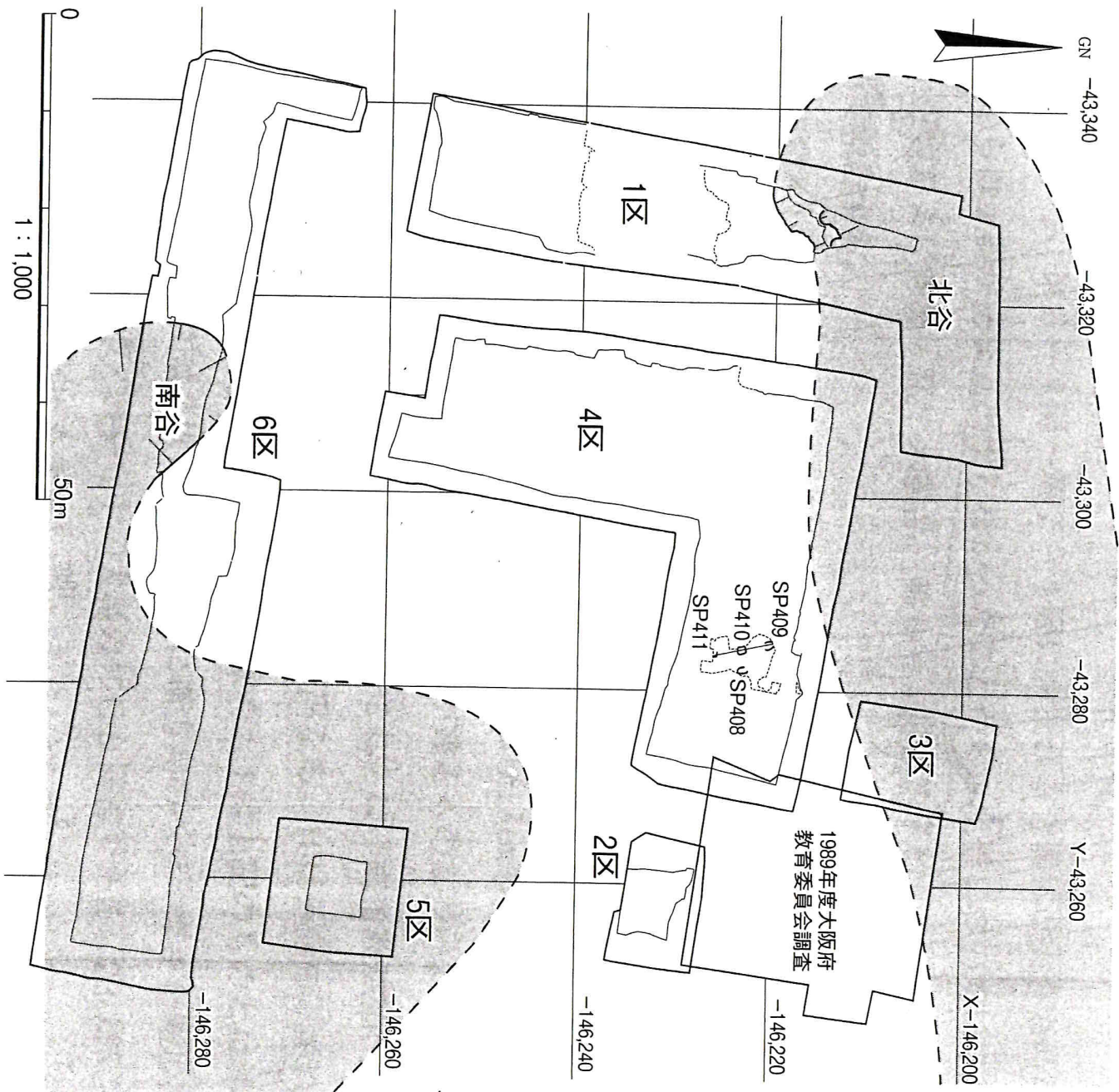
1409

第242図 焼けた白壁が出土した所

1309

『朝日新聞』平成22年10月14日付「大阪・前期難波宮跡で
出土」参照 p. 540

B



1,286^P-5/7

541

1465 第243区 難波宮の焼けた白壁出土地点近傍区
 1366 難波宮址の研究 第18 公益財団法人『大阪府博物館協会』大阪文化財研究所

2012年6月29日発行 13頁参照

166 北谷および南谷は、猫間川の水を引いてた場所なのかは不明なため、水汲場だったのか、遊興の場だったのか、等といった詳細は不明

1286^P-6/7

C



1304^{J4}G — 北谷第6-4層出土 I 類壁土

542 * 左右に突出している I を打ち込んで下さい。

1286^P-7/7

D



ゴ4
14Q9

写真図版215 難波宮の白^{かへつち}壁土 → 北谷第6-4層出土 II 類^{半角片}壁土 ← 13Q9 ゴ4
13Q9 ゴ4 『難波宮址の研究』第18^{半角片} 公益財団法人^{半角片}大阪市博物館協会^{半角片}大阪文化財研究所、2012年6月29日発行
原色図版二、前期難波宮の壁土（一）参照 543^P

焚けぬし
とある。
・壁材は通常、時ととも土に戻ってしま
が、今回見つかった壁材は焼かれて硬くなっ
ており、宮殿東端にあった谷にまとめて捨て
られたため、奇跡的に残ったらしい。
・奈良文化財研究所の箱崎和久日遺構研究室
長（建築史）は、
「白壁は、何層にも塗り重ねた精巧なつく
り。少なくとも四種類、宮殿中核とみられる
建物の壁土が確認できる。古代宮殿などの建
物の壁土としてはおそらく最古だろう」
と語っている。（「朝日新聞」平成二十二年
十月十四日付）焼けた白壁、宮殿の記憶
「難波宮址の研究」第十八、公益財団法人
大阪市博物館協会（大阪文化財研究所）
（平成二十四年）
（一二年六月二十九日発行参照）

①1286^左に右側同様の文
①1305^左「にみかえりす」
①1286^左

大カマ 2298^左
鉛

1,287^左 - 2/3

みかえり平城京 14^左

参考

①1286^左 - 2/3
①1286^左 - 3/4

1463^左

③ また 奈良の都の第一次朝堂院南門の礎石

について、概略次のように述べられている。

「地上に持ち上げられた礎石の表面には

直径六〇センチを超える太い柱を置くための柱座

があった。柱座の土をきいに掘るに落し

水をかけた後、石の表面を詰めた。

目を凝らして石の表面を見詰めた。

青丹よりと歌わせた奈良の都の朱塗り

の門柱が、上に載つていた石である。

鉄錆と胡粉を混ぜて塗り上げたベンガラ

の朱色が、下の石に染み着いてゐることは当

然考えられた。

ちよつと赤いようにも思えたが、はたして

気のせいだろうか――

という。(「よみかえり平城京」坪井清足監

修、日本放送出版協会、一四頁参照)

・あるいは、

門柱は白く塗られていたとはいえ、門の

両脇に設けられた「観」が、青や朱色で

奈良時代には、塩基性炭酸鉛(鉛白)

酸化鉄

①1289^左 - 1/2
11行

④ 1287-1/2 3斤紫瑠璃王 H20(2018)510世〜511(4世)

⑤ 1286-2/1 下 12斤

1,287-3/3

⑥ 1287-1/2 10斤

⑦ 1286 雜門 1/17 17斤朱青段と備え

1172 彩る 160^p

華やかに彩られていたから、青丹よしと
歌われたので、うか
なと想像される
* 日 関 どの人なものを、たのよく分かる
ないか、新色さめていた可能性も高そうである。
④ 一か一ながら、
へ 唐(六一八〜九〇七)の長安城の朱雀門
の門柱が朱塗りだったとすべし、
を見倣い、平城宮の朱雀門も同様に朱塗り
された
という経緯があったのかも知れない(要検討)
*
なお、この物語において、通説に
へ 宮垣室屋が、彩色さめていた
と述べることにしよう。
・ 事実と違いうようにも思われるが、
どうなのだろうか。

はたして
前頁14行

「小町」54° 9分

「天」板10分

1,288°

あや 小町 283°

宮垣 308°

陽渠水 1285° 右真末

「眼前に」1290° 14分

「天」1277° 3分

頭第9 (図参照)

陽門であり、東方の門は開陽門である。(巻
の宮城門があり、東方へのびる城壁には二つ
の宮城門があった。西方の門は宣陽門と津
が威厳を保って配置されていた。
る宮城城壁の南面には、合わせて四つの宮城門
が威厳を保って配置されていた。
なお、平昌門の西方へのびる城壁には二つ
の宮城門があり、東方へのびる城壁には二つ
の宮城門があった。西方の門は宣陽門と津
陽門であり、東方の門は開陽門である。(巻

宮城の正門

平昌門の左右に伸びる宮城の城壁は、内な
る口王宮(南宮および北宮)も、しつかり
守る構えを見せている。目もくらむほどにま
まも、一直線状に、真直ぐに連うな
る宮城城壁の南面には、合わせて四つの宮城門
が威厳を保って配置されていた。
なお、平昌門の西方へのびる城壁には二つ
の宮城門があり、東方へのびる城壁には二つ
の宮城門があった。西方の門は宣陽門と津
陽門であり、東方の門は開陽門である。(巻

橋のすぐ近くへとやってきた。
すると、視界はいつぱんに開け、宮城の
まわりを囲む宮牆(宮垣)の南面全体が、実に
気も遠くなるほどの広がりをもつて、眼前に
妖しく、幻出した。(巻頭の第9 (図参照))

難、千米等は、陽渠水にかけ渡さ小て華麗な
橋のすぐ近くへとやってきた。
すると、視界はいつぱんに開け、宮城の
まわりを囲む宮牆(宮垣)の南面全体が、実に
気も遠くなるほどの広がりをもつて、眼前に
妖しく、幻出した。(巻頭の第9 (図参照))

日 閃光
1263°

1276° ひととき
1283° 14分

347
城の門をいう

347
城の門をいう

せんこう 元 吹光 1263^P
 ほろせん 元 2019^P
 惘然 あきれてあつたところまで
 讀称 元 922^P
 1,289^P-3/2
 「似つかわしい」顔！
 元 1697^P
 目もあや元 2162^P
 は 元 張り裂く 1826^P
 とうせん 元 陶生 1573^P 名状 一しかたの情事
 元 1358^P (胸が)高鳴る
 元 2165^P 見ろめを元 2124^P

難^な升^と米^みは、思^{おも}わす叫^{さけ}んでいた。
 のが あった。
 この時、サツと閃光のようになり、
 と打ち明^あめていた難^な升^と米^みの脳裏に、
 艶やかな宮城を、ただただ陶然^{とうぜん}
 といつても、過言でなかつた。
 魏^ぎ国の繁栄の最^{さい}も見事な象徴^{しょうてふ}
 麗^うわしい都^{みやこ}よ
 讃^{さん}称^{しょう}して余りある壮麗な帝都^{さうれいなていと}。それは
 の王城^{おうじょう}よ。日名都洛陽^{にみんとらくやう}という名に恥^はない
 ていた。
 へああ、まことに美しい。目もあやな洛陽^{らくやう}
 難^な升^と米^みの胸は、張り裂^はけんばかりに高鳴^{たかな}つ
 入^いるように見詰^{みづ}め続けていた。
 本^{ほん}当^{たう}に、なんとすばらしい都城^{とけい}なのだろう。
 名状^{めいじょう}しがたない一種不思議な感動^{きんどう}に心震^{こころふる}わせ
 ながら、難^な升^と米^みは、しばし言葉もなく、食^くい

1.290^P

王の居所 木村 243' 入 229' 似付かわい 697' 偉大 116'
 (三) 足元 加行 王城の祥 1135P 16分 三国史書 105P
 地府物事の中心

「うむ、まさしくこれだ。私が探していたのは、この洛陽の都だったのだ。偉大な帝都、名都洛陽城こそ、東海海中の邪馬台国の都として最も似つかわしい王城の府といえよう。周囲の正統な流れの末裔である女王曰御子の居処として、この洛陽の都以外に相応しい王都があるとは思えない。私の眼に映っているこの都の何と美しいこのとよ。尊厳きわまりないこの大都城をこそ、私は探していたのだ。」

難升米は、いまさらながら、目のさめる思いであった。長い長い間、胸につかえ、何か分からぬまま探し求めていたものが、――

ふいに突然、眼前に現われたその大きな驚きに、からだ中の血潮が逆巻くばかりに、馬に立ち、目の前がぐらぐらと揺らいだ。難升米の双眸に、涙がにじんでいた。女王曰御子が御治めになるべき都の理想の姿を、私は今、目にしているのだ。私にはこの名都洛陽よりも、荘厳な王城など考えられない。城

深が
前門 大毛 } おゆ
在す
おゆ
御座す

のよう^にに^に震^{ふる}う^るわ^るし^くと^と壯^{さう}大^{だい}な^な都^{みやこ}では^ない^いか。
 私^{わたし}の^の成^{なり}す^{べき}は、^のこ^こと^とだ^たった^の
 難^{なん}千^{せん}米^{まい}の^の胸^{むね}中^{ちゆう}には^は灼^{しやく}の^のよう^のな^な熱^{ねつ}情^{じやう}熱^{ねつ}が^が燃^も
 えあ^あが^がつ^つて^てい^いた^た
 こ^ここ^こに^に難^{なん}千^{せん}米^{まい}は^はき^きつ^つと^とし^した^た眉^{まゆ}を^を上^あげ^げ
 洛^{らく}陽^{やう}に^に滞^{たい}在^{ざい}し^して^てい^いる^る間^{かん}都^{みやこ}城^{じやう}内^{ない}の^の
 す^すみ^みず^ずみ^みま^まで^で見^みて^て歩^{ある}き^きど^どー^ーと^と倭^わ国^{こく}で^での^の新^{しん}
 城^{じやう}建^{けん}設^{せつ}に^に必^{ひつ}要^{よう}と^と思^{おも}わ^われ^れる^る、^あり^りと^とあ^あら^らゆる^る事^{こと}
 し^しかり^{かり}頭^{あたま}の^の中^{なか}に^にた^たき^き込^こんで^で
 も^もを^を吸^き収^{しゆう}し^して^て祖^そ国^{こく}へ^へ帰^{かえ}ろ^うう^う
 と、^この^の内^{うち}に^に誓^{ちか}つ^つた^た。
 倭^わ国^{こく}へ^へ帰^{かえ}還^{かん}し^したら^ら、^この^の洛^{らく}陽^{やう}の^の都^{みやこ}と^と寸^{すん}分^{ぶん}
 違^{ちが}わ^わな^ない^い王^{おう}城^{じやう}を^を築^{きず}い^いて^てお^おい^いて^ても^も
 我^わが^が国^{こく}の^の女^{にょ}王^{おう}日^ひ御^み子^こが^がお^お住^すまい^いに^になる^る新^{しん}た^たな^な帝^{てい}都^と
 と^とし^した^たい^いし^した^た都^{みやこ}と^と寸^{すん}分^{ぶん}違^{ちが}わ^わず^ず作^{さく}る^るこ^こと^とを^を
 難^{なん}千^{せん}米^{まい}の^の頬^ほを^を、^あつ^つい^いもの^{もの}が^が、^しら^らく^く光^{ひか}つ^つて^て流^{なが}
 れ^れ落^おち^ちて^てい^いつ^つた^た。
 し^しか^かし^し難^{なん}千^{せん}米^{まい}は^は、^それ^れを^を振^ふり^り払^{はら}お^おう^うと^とも^もせ
 ず、^きん^んぎ^ぎに^に翻^{はん}翻^{はん}と^とひ^ひる^るか^かえ^えつ^つて^てい^いる^る黄^き色^{いろ}い^い旗^{はた}

③ 1289^{1/2} 尊卑を区別する
1457

1291^{2/2}

因みに④ 1287^{1/3} 9^分 治由 1290¹ 未24^分
秀吉迄④ 1287^{1/3} 2^分

小林^P 232^P 元294^P

をいっで見つめていた。
■ いや、もはや、難^な升^と米^みの目^めには、何^{なに}物^{もの}も映^えいてはいなかった。
■ そのかわり、難^な升^と米^みの心^この内^{うち}には、
■ 畿^きかな中^{なかつ}にも華^わ麗^{れい}な美^{うつく}しさたたえ、倭^わ国の
■ 国力^{こくりき}の極^きみを尽^{つく}して造^{ぞう}営^{えい}されるべき、夢^{ゆめ}のよう
■ な我^{われ}か国^{くに}の都^{みやこ}、名^{めい}都^と洛^{らく}陽^{やう}城^{じやう}が映^{うつ}つていた。
■ それ、倭^わ国^{こく}の女^に王^{わう}日^ひ御^{のみ}子^この皇^{かう}都^ととて、
■ まことにふさふさい、一大^{いちだい}都^と城^{じやう}の存^{ぞん}在^{ざい}であっ
■ た。
■ 莊^{そう}嚴^{げん}な
■ 因^{ちな}みに述^のべると、
■ (1) 最^{さい}外^{がい}外^{がい}郭^{かく}城^{じやう}の正^{せい}門^{もん}には、双^{そう}脇^{けつ}(脇^{けつ})が設^{もう}け
■ られていなかった。
■ 最^{さい}外^{がい}外^{がい}郭^{かく}城^{じやう}の内^{うち}側^{がわ}も外^{そと}側^{がわ}も一^{いつ}般^{ぱん}庶^{しよ}民^{みん}の居^き住^{じゆう}
■ 地^ちであつて、――――へ尊^{そん}卑^ひを区^く別^{べつ}する必^{ひつ}
■ 要^{よう}性^{せい}が全^{ぜん}く無^なかつた。からであらう。
■ (2) そこで、宮^{きやう}城^{じやう}内^{うち}にのみ、――――尊^{そん}卑^ひを区^く別^{べつ}
■ する為^{ため}の双^{そう}脇^{けつ}(脇^{けつ})が建^たてられた、
■ と解^{かい}される。

(*)